

イタリアの歴史的地域における文化的景観と生活空間に関するフィールド研究

代表 稲益 祐太 (法政大学デザイン工学部 研究補助者)
委員 陣内 秀信 (法政大学デザイン工学部建築学科 教授)
委員 樋渡 彩 (法政大学大学院デザイン工学研究科 博士後期課程)

[研究報告要旨]

本研究は、イタリアにおいて文化的景観として評価されている歴史的地域における景観の形成と変遷、およびそこで営まれている生活の場としての生活空間の構成を明らかにすることを目的とする。近年イタリアで見られる、田園風景の再評価による、地域の経済や産業、建築物などの再生についても考察する。そこで、ユネスコに文化的景観として認められ、世界遺産に登録されたトスカーナ州シエナ県のオルチア川流域とカンパーニア州サレント県のアマルフィ海岸を対象とした。それぞれの地域で、都心部と田園部における生活空間の事例を採取した。

本研究の主な資料は、現地での実測や聞き取り調査によるものである。聞き取り調査では、行政機関や研究機関だけでなく、店舗や宿泊施設の経営者、一般市民にも詳細な聞き取りを行なった。また史的分析には、不動産登記台帳地図（カタスト）や古写真、古地図、さらに I.G.M（イタリア軍事地理院）の地形図や航空写真などを用いた。

分析の手順として、まず地理的条件や地域形成の歴史などを概観する。その上で、地理情報システム（GIS）を用いて、景観の変化を分析した。生活空間に関する分析は、まず詳細な地図や実測図面等を用いて、空間構成や都市構造のなかでの位置付けを認識・評価した。次に、建物の再生手法や活用方法について、政策や法律、商店や宿泊施設の経営者の動向、人々の価値観の変化から総合的に分析した。また、景観保全政策やまちづくり活動の先進事例であるオルチア川流域では、その取り組みや施策について、近年の地域再生の視点から分析した。

以上の事例分析を通して、地域の再生において、自然風景だけでなく、人の手による変更も景観として包含する文化的景観の保全が、歴史と自然の恵みを生かした地域づくりに大きな役割を果たすことが分かった。